

七ヶ浜町立遠山保育所

東日本大震災から約半年が経つころ、復興事業として始まった保育園の建替計画である。庭を大きく囲み、水平方向の広がりを持たせることで、町の穏やかな環境に対し控えめな高さの外観と、周囲に残る緑豊かな環境と連続した開放的な中庭を生みだそうとした。環状部分は、町の人々と意見交換会をくり返し、様々な要望がダイレクトに反映されるよう設計した。ここで生きる人が野原で輪になり一つの建造物をつくるということになるべく形に表そうとした。結果として外形は不規則で幾分混沌としているが、低空に四角く切り取られた園庭が象徴的な存在となり全体を秩序立てる。諸室を巡る体験は、小さな村落を訪れるようなものである。新しく建築をつくる時も経緯や成り立ちが必ずあり、ここではそのことが建築に現れることによって、過去の歴史や未来の新しい人間活動が連続するのではないかと考えた。室内は外部へ可能な限り連続するように考え、建築がこれまでの存在性を少しだけ解放され自然に近づき、環境と一体化していく。古代遺跡にも近いあり方である。全体がある一つの環境として捉えられ、この保育所を訪れる町の人々の日常に、ある種の旅のような解放的な体験を少しだけでもたらすことができる考えた。単一機能の箱形の保育施設というよりむしろ、子供たちが自由にかけて巡り遊ぶための町のみんなの庭であり、その周囲で保育士や近所の大人たちと一緒に過ごす場所がありそれが保育所となる、というものである。